

## 義父・牧口常三郎の思い出

金子貞子

紀伊国屋書店評伝シリーズ《学問と情熱》第33巻『牧口常三郎 こどもたちのしあわせのために』（斎藤正二監修、2005年）の本編および特典映像に収録されている金子貞子さんの証言を紹介する。

金子さんは、牧口常三郎が校長をつとめた東京市白金尋常小学校で学び、1939（昭和14）年3月25日、牧口の三男・洋三と結婚。その後、洋三が中国に出征し、牧口が1943（昭和18）年7月6日に治安維持法違反と不敬罪の容疑で検挙されてからも、義母・クマを助けて牧口家を支えた。牧口の獄中からの書簡を保管し、それは『牧口常三郎全集第10巻』（第三文明社、1987年）に収録されている。牧口は、最後となった1944（昭和19）年10月13日付の葉書で「貞子ヨ。御前ガシツカリシテ居テクレ [ル] ノデ、誠ニタノモシイヨ。実ノ子ヨリハ可愛イコトガ、シミヽヽ感ゼラレル。非常ニ賢イ洋子 [洋三と貞子の娘] ヲ、立派ニソダテ上ゲテ、吾等ニ孝行シテ呉レルコト、二人共、老後ノ唯一ツノ慰安トスル」と述べている。同年8月31日に洋三が中国で戦病死（享年38）したあと、同年11月17日から18日にかけて牧口の獄中死に立ち会った（戦後再婚し、現在の金子姓になる）。

以下の証言の元になったインタビューは2005年3月15日に行われた。インタビューには吉沢泰樹（紀伊国屋書店映像情報部部長）、塩原将行、伊藤貴雄の3名があたった。（編集部）

### <本編から>

金子 昭和14年に私が片付きましたから、牧口へ。ですから昭和14年以降、3月以降ですね、お供して行ったのは。ですから、結婚してから連れて行っていただいた時に、その席で話されていらしたんですね。それこそ、小学校から大学まで、御自分が今研究している創価教育というのを根本とした教育方針、教育するためには、そういう学校が大学が欲しいと、願ってるんだってことを言ってらして、戸田君、僕の代ではできないけど戸田君の代で必ずできるんだよっていうことを言ってらっしゃいましたね。だけど戸田先生は、ご病気でね、残念ながら亡くなられましたけど、池田先生が——全然ご存知ないんですから、牧口先生に一回も会ってないんですから——その牧口先生のご意志をね、戸田先生からももちろんお聞きになっていらっしゃると思いますけれども、ほんとに池田先生が全てを实践してくださっている、実行して下さったってことは、だから現在創価大学でそれを実施されてるんですから、みなさんどんなにかお喜びだろうと思いますよ。だからお義父さんにはほんとにどんなにか喜ばれてるかと思って、なんか義父の顔が見え

---

Sadako Kaneko（牧口常三郎の三男洋三の妻）

るよう、ほんとに。お義父さんは笑顔がとっても、厳しい反面に笑顔がとってもいい笑顔なさいましたからね。思い出しますね、ほんと。

### <特典映像>

——小学校の3年生までが牧口校長先生…。

**金子** はい、そうです。私の兄弟は兄もみんな牧口先生でしたけど、戦争で亡くなりましたから2人ともおりませんが。うちはね、丁度商売しておりましたものですから、目黒の駅から、先生は白金まで、学校までお歩きになるんですよ、そうするとね、いつもうちをのぞいてくださって、母とか父は大変懇意でございましてね、母のことはよく覚えて、私が結婚してからも、母のことはよく話してくれました。で、母は9つの時に亡くなりましたのでね、それが昭和5年でしたから、その時に、亡くなった時すぐ牧口先生は訪ねていただきました。

——校長時代ですよ。

**金子** ええ、そうです。父は牧口先生とは評議員の、今のPTAですか、役員しておりましたので学校と校長先生とは大変懇意でございましたから。だけど先生はほんとにほかのことに關しては一切厳しいんですよ。ですけれども、ほんとにまた反面、慈悲の深い方でしてね。小さい時からご苦労が多かったことを、お義父さんはひと言もおっしゃらないんです、そういうことは。愚痴もこぼされないし、母からそういうことを、ご苦労されたことも聞いておりますので。全然お聞きしたことないんですよ。ですけど、とっても温かい気持ちで接してくれましてね。私がほんとにまだ若かった、18ぐらいの時にお話があったんですが、19の時に牧口に参りまして、その時にうちの父も、なんにも仕込んでないし勉強もしてないから、しばらくはお伺いできませんよということでお話したんですよ、ところが私が仕込むからいいから来てくれてことで、お義父さんのお話で、行く気になりました。ほんとにやはりそうお思いになったせいか、一つひとつ教えてくださいましてね、どこ行くんでもお料理の件でも、ただ本見ただけでは駄目だよ、食べてみないと味が分らない。で、連れてってくださいましたりね、いろいろそういうことはほんとうに教えてくださいましたね。だから、何から何まで全部思い出がいっぱいあります。

——特に何か、思い出として残ってるというか…。

**金子** それはね、私の出産のときです。出産の時に、一か月早く出産したものですから、すぐ近くに新潟の同じ県人の方で、産婦人科がございましてそこに入院する予定でございましたけれども、あたしは病院に入るの嫌だから、どうしてもうちで出産したいということで、それで院長さんに来ていただいて、出産したんでございますけど。それから、お乳がやっぱしなかなかな思うように出ません。そうすると、義父はやはり荒浜、海で育った方なものですから、お魚のあらとかそういうものを味噌炊きにして、そういうものを食べると乳が出るよとか、それをそういうのを何かのお出かけの帰りに魚屋さんに寄って買ってきてくださった。そしてそれを炊いて食べるという。そういうこととか、あと甘酒が大変いいっていうことで、甘酒を買ってきてくださった

り、ほんとに実の父以上に思ってくださいましたね。だから私もね、やはりそういう義父のほんとに思いやりのある気持ちに対しては、多少どんなことでも仕えたいと思いましたね。そういう思い続けでした。

——辛い話にもなってしまうのですが、ただこのことは、語り残しておきたいと思うのですけれども、牧口先生が逮捕されて警視庁で会ったのは貞子さんだけなんですよ。

**金子** それが、お元気なときにお会いしたのはそれが初めの最後ですね。9月25日だと思いますね。確かそうじゃなかったですか？ あ、警視庁から拘置所に行ったのが9月25日。それまでは7月の7日でしたね。7月7日に警視庁で会いました。目白警察から来てくださって、私一人参りましてね、昼ごろ丁度着きますよとおっしゃったんで。あの当時はらせん階段があったんです。3階の一番上にいなさい、で、3階の階段上がった所で私待っておりました。何人かのお連れ、連れられて上がって来られたんです。それがもう私の先生がお元気な時に会った初めの最後でしたね、それが最後でしたね。

——その後、差し入れ等はできても…。

**金子** 差し入れできてもお会いできませんから。もうほんとにそれが最後でしたけれども、ほんとに先生しっかりしてらっしゃいましてね。心配することは何にもないってことをおっしゃってくださいました。ただ信心だけは怠ってはいけないよって、大きな声で私に向かって言われました。

——そして、最期の日の前日、ご連絡いただいて…。

**金子** ええ、電報来たんです夕方ね、丁度薄暗くなる頃に電報を頂きましたね。で、こちらへ参りました。もうほんと、生まれて初めて行った所ですから、もうあの音がね、ドアを開ける音が大変嫌ですね。なんとも重い音でね。開けてくださって、案内していただいて。そしたらその時はすでに病棟のほうに移られていましたけれど、移られるまでのことを、連れてきてくださったその方が、案内してくださった方が、お義父さんの話をしてくださいました。とても衰弱してらしたので、お背中へおぶりましようって言ったら、いやもったいないそんなこと大丈夫ですとおっしゃって、よろよろしながらもしっかりした足取りで、まあ一回くらいちょっと転ばれたみたいですね、そのときに手を差し伸べられて手を引きましたっておっしゃってました、その案内してくださった方が。それでベットへ移られたら本当に静かにお眠りになって、今この状態なんですっておっしゃって。それでその時に、私、衣類をちょっと調べて、足袋とかそういうものをどういう風にしてらっしゃるかと思って調べたんです。そしたら、全部きれいなものに着替えられて、足袋もきれいな足袋をはかれてね、それでいらっしゃいました。枕の下に私どもがうちのほうから出した手紙をですね、こう重ねて、私が行ったら見えるように、枕の下に重ねてあるんですね。だから、それも行かれる時にご自分は覚悟をして、ちゃんと懐に入れてお持ちになったと思うんですよ。それを枕の下に置いておありになりましたからね。ほんとに、立派なご様子でし

たね、もう忘れられないです。実に素晴らしい。私もね、自分がそういうことに置き換えて、できるだろうかって、私いつも思うんですけども。ああいう立派なご様子を見せていただいて、お義父さんは私のことを教えるよっておっしゃって、最後の最後までそういうことを教えてくださったと思うんです。だから私は、生きているうちはお義父さんに教えて頂いたことを、全うしたいと思いますね。ほんとに立派な方でしたね。

——創価教育学体系の序文を見ますと、いろんな手紙の裏とか紙の切れ端に書いたものが、いつのまにか何箱かになって、鼠が巣食うようになってしまって家族に文句を言われたという、ユーモアから書き始めておられる…。

**金子** そうですね、書いてらして、多かったですね。ほとんど私も、牧口先生っていったら、しゃんて座って、いつも万年筆持って遅くまで、夜でも遅くまで書いてらしたんですよ。後はね、お出かけなさることも多くて。

——じゃあ、牧口先生という毎日のようにあちこちに講演されていく、その夜中に机に向かって…。

**金子** ええ、夜にお書きになりますね。私なんか夜ちょっと起きて、降りてくとまだ起きてらしてね。

——夜中の何時くらいまで。

**金子** 結構遅くまで、時間はね、分かりませんが、12時過ぎまで起きてらしたことが多かったですね。

——最晩年の書齋っていうんでしょうか、牧口先生の執筆のお部屋っていうのは、どんな雰囲気だったのでしょうか。

**金子** もうほんとに簡素ですね。あの時は、先生が退職されたのは、あの当時の4千円ですよ、退職金。それで、4千円の半分の2千円は、本のために使ったんですよ。体系の出版のために使ったんです。あとの2千円で、家を建てた。ですけど、長女のお嬢さん(にい)っていうんですか、お義父さんが全部請け負ってくれまして建てられたんです。小栗って言うんですけど。建ててくださったんですけども、2千円じゃなかなかないんですね。そしたら、義父がどうしても自分の勉強するテーブルと本を置くところが欲しいから、追加したんですよ。それは全部お義兄さんのおうちのほうでやってくださったみたいなお話を聞きました。

——三畳一間くらいですか。

**金子** 三畳一間くらいですね。

——いわゆる書齋、普通のお部屋より狭い。

**金子** そう。三畳の部屋にテーブルがありましてね、椅子とテーブル。あと後ろほうに本棚がありましてね、本がいっぱいあったんですよ。けどもう、5人くらいの方が来て、みんなほとんど原稿から何からみんな持っていかれましたね。ほとんど原稿なんか。そして義父は、この原稿は大事なものだから貞子さんいじないで大事にしといてくれとおっしゃったんですよ。全部持ってっちゃった。

——それは、かなり最晩年ですね。検挙される時。

**金子** 検挙の時に。下田であげられるのと同時に来たんですよ、うちに。5人くらい、朝6時頃みえましたよ。

——その時に、この原稿は大事だっというのもかなりあったんですか。

**金子** ええあったんです。それはほとんど持って行きましたね。その原稿っていうのは、時習学館で戸田先生が、あれやりますでしょ、模擬試験。あの時の試験の残りの紙をいただいて、それを裏返しに使うて全部原稿書いてらしたんですよ。ほんとにね、物を大切にされたんですよ。私達がちょっとでも無駄に紙を使いますと、もったいないっておっしゃって注意されました。ほんとに物を大切に、それで価値的に物を使うべきだっって、もういつも言われてね。

——ご家庭でも価値的にという…。

**金子** 日常生活の中に常にね、そういう言葉が先生出て、無駄は一切しちゃだめってっていうことでね、言われました。

——その幼少期の頃というのは…。

**金子** 生まれた時のことは全部義母から聞いてるんです。お義父さんはおっしゃらないんですよ。一言も言わない。ただ勉強のことについては、おっしゃいましたね。

——その14歳の時に、師範学校受けたらいいよというのはお義父さんからお聞きになった。

**金子** それはね、義父が言ってましたね。師範学校。その小樽の署長さんが学校へ入りたければ入って、後は教員になってから返せばいいんだっってことをね。それで奨学金のことをしきりにおっしゃってましたね。その、ご自分が苦労なされたから、そういう言葉が出るのかなと私はその時、うかがった時に思いました。だからすぐ奨学金をね、できましたよね、大学できてから。

——私も本当にそれに助けられた一員でもありますし、創価教育学体系を拝見しますと本当に教育は子どもが幸せになるためにあるんだっというその言葉が何度も何度も…。

**金子** ほんとそう、子どもさんに会う時、にこにこしますもんね。義父はもうほんとに嬉しそうに。だからうちの子どもなんかとつてもかわいがってくれまして、何でもやらせる、やらせるっ

て。危ないからやめてくださいって言っても、経験しとかないと駄目だって言うんですよ。もう何でもね。お義父さんの言うとおりに、何でもはいはいって言ってこちらは、おまかせで。

——やっぱり子どもさんと接する時には、あるいは生徒さんと接するときには、本当に朗らかな牧口先生…笑顔になる。

**金子** そうですよ。初めての総会の時に、あそこは小学館じゃなくて。ありましたね、水道橋かなんかのあそこに。

——菊水亭。

**金子** 菊水亭じゃなくて、あのところでやったんですよ。その時に、牧口先生が壇上でお話をされている時に、うちの孫がやっとちょろちょろ、やっと歩けるときに、それをね、おじいちゃんの所へあがっていっちゃったんですよ。段の上に。そしたら喜んでね、義父が喜んで、洋子を抱きながら話を。それはもうほんとにびっくりしました。私も。でもほんとにあれ不思議でしたね。あれはね、義父が抱かれてお話されてました。

——それも初めて聞くお話で。今日びっくりしてます。

**金子** そんな思い出があるんです。だから皆さんがすごい拍手でね、皆いらしてる方が拍手してくださいってね。お義父さんも嬉しそうだった。

——写真でみると本当にみんな決まった顔で写ってますから厳粛な会合としか思えないですけども、その中にそれだけユーモアというか明るい…。

**金子** ほんとうにそういう所ありますね、お義父さんは。…勝手なことばかり申してすいません。

——いいえ、ありがとうございました。

**金子** ありがとうございました。

(世田谷区下北沢 レストランTにて)